

## 行為的自己の否定性と生命の表現——西田幾多郎におけるケア論の可能性——

丹木博一（上智大学短期大学部）

私たちは他者からケアされつつ、自己をケアし、また他者をケアして生きている。ケアとは、対象者が自らを表現し、自身の力を発揮して生きることができるように支える行為の総称であるが、それは生きるための条件というだけでなく、生きることの不断のモメントでもある。人間がケアされケアして生きているということは、一方で、人間が弱く、傷つきやすく、否定性に貫かれた存在であることを意味すると同時に、他方で、人生が自らの手で作り上げるべきものであり、絶えざる労苦に他ならないことをも物語っている。

西田幾多郎の思惟に固有な特徴の一つは、こうした人間の弱さと創造性の両面を「行為的自己」の立場によって統一的に理解可能にしようとした点にある。西田は、反省によって対象的に見られた自己を知的自己と呼び、それを仮象として斥ける。むしろ人間とは、無にして見る行為的自己であり、作ることによって作られたもののうちに自己を見ると同時に、「作られたものから作るものへ」という否定的媒介によって絶えず形成され変化する身体的存在と見なされる。この場合、変化とは、実体的連続性を前提とした質や量や場所の変化ではなく、自己を超えたところに自己同一性を持つものの変化であり、死して甦ることを指す。西田は、人間を生滅し生死する行為的自己として捉え、無にして有であるという自己矛盾のうちに自己を見て取ろうとしたのである。

西田はさらに行為的自己の立場を場所論的に掘り下げ、人間が生まれ、働き、死に行くということを成り立たせる存在論的かつ認識論的な場所を問い求めて、歴史的世界に至り、否定性に貫かれた人間を歴史的世界の創造的要素と見なした。つまり客観的な事実が行為に先立つものとして前提されるわけでもなければ、反対に行為によって事実が主観的に構成されるわけでもなく、世界は行為を介して自己限定するもの、つまり生命の表現として捉えられる。このとき、生命とは了解されるべき対象というより、むしろ行為的直観において自証されるものだとされる。西田はこのように、行為的自己を貫く否定性ゆえに自己が創造的でありうることを自覚したが、自己を独我論的に捉えるのではなく、あくまでも他の個物に対する個物として捉え、個物と個物の相互限定がそのまま一般者の自己限定であるという論理を提起する。その際、西田によれば、私と汝とは対象的に対峙するのではなく、自己の生命の底において相対し、かつ表現的媒介によって相対するのである。

このような西田の考えに照らして見るとき、他者に対するケアという行為は一体いかなる構造を持った営みとして現れてくるだろうか。また、ケアにはいかなる可能性が認められるようになるだろうか。提題では、行為的自己の立場からケアという行為の成り立ちを捉え直すことによって、対象論理の立場では対処できないケア主体の形成の問題に対し、西田の思惟が解決への糸口となりうることを示したいと思う。